



古くなり取り外された水車は再度加工され別のものに生まれ変わるそうです。



事故だけではないように打ち合わせは真剣そのもの。

Public relations
OZU TOWN

広報 おおづ 2016 3

発行・編集 ■大津市・総合政策課
〒869-1292 熊本市東区大津町大字大津 1233 番地
TEL.096(293) 3111 <http://www.town.ozu.kumamoto.jp/>

200 印刷 ■ノーブ印刷株式会社
※広報のおおづは環境配慮して再生紙と植物インクを使っています。

UD FONT
見やすくて読みやすい
ユニバーサルフォント
を採用しています。



「残したい想いを形に」

の むらてつ や 野村哲也さん じょうの しょういち 城野昭一さん ひがしたかゆき 東孝行さん や の しんいち 矢野慎一さん

「大津は昔、水車の町だった、その技術を次代に伝えたい」と腕を振るう人たちがいる。今回は、そんな大工と有志をクローズアップする。

その復元水車は大津の中心、カフェの地下にある。初代の水車が設置されたのは平成15年。もともと製粉工場だった場所にカフェを作り、その昔、製粉業で栄えた「水車の町」を再現する狙いで復元された。当時、復元した水車大工の名前は藤原清司さん。その時に一緒に立ち会い作業をしたのが城野さんだ。「話をもらったときは俺は俺じゃないかと思った」とポツリと語る。藤原さんが3年前に亡くなり、今は城野さんがその技術を引き継いでいる。

「藤原さんの『藤原式水車』は歴史と伝統ある働く水車、観光地にあるような『見せる』水車とはやっぱり違う。無駄がなく、水の力を動力に変える。全国でも残っているのは少ないんじゃないかな」と話してくれたのは矢野さん。

「普段は大工をしているから、城野さんがいてくれてよかった。藤原さんの技術を伝えてくれたから、この水車ができる」と東さんは水車の部品を持ち上げる。「本職は大工ではないので私はお手伝いなのですが」と話すのは野村さん。「やっぱり昔の技術が職人の皆さんに受け継がれているのはいいですね。ロマンを感じます」直径約3メートルある水車が少しずつ組みあがっていく様子は芸術性さえも感じる。

この木製水車の寿命は約12年。「この二代目復元水車が無事に動き出すまでが私たちの仕事。でも、三代目の水車ができるようにこの技術と心意気を次の時代につなぐまでが本当の仕事かな」と照れ笑いをしながら語る4人。「残すこと」は言葉以上に難しい。それを可能にするのは、このまっすぐな瞳かもしれない。

ついでの声

▼水車取材は役場の近くの「水車物語」さんの水車でした。伝統を守りたいと自分たちでお金を出して復元しているそうです。やっぱり大津町は熱い人が多い。私が町を好きな理由の一つです▼二代目復元水車は現在元気に稼動しています。水車と水の輪唱に不思議と心が癒されます▼ハンセン病特集は菊池地域の四市町の合作です。私自身が勉強不足で初めて知ることが多くても勉強になりました▼皆さんにも読んで考えていただけたらうれしいです (IDEO)

からいもくん便り

大津町総合情報メール
携帯電話やパソコンのメール機能を活用して、生活に役立つさまざまな情報をお知らせするシステムです。
登録方法: ozutown@gw.ansin-anzen.jp に空メールを送信してください(スマートフォンの場合は件名に任意の1文字「あ」などを入力して送信)。
QRコード



大津のことがもっと好きになる情報誌

広報 おおづ 3

MARCH 2016

町村合併 60周年記念

今月の表紙

2月5日に陣内で行われた第6回麦踏みフェスティバルでの一コマ。ドラム缶転がし競争が行われ園児たちは楽しみながら麦踏み体験をしていました(記事は20ページ)。

今月のみどころ

心の壁を越えるとき

菊池地域合同特集
～ハンセン病問題を考える～